目　次

第1章　序　章 1

1. 本書の背景と目的 1
2. 対象となる現象 4
3. 本書の構成 8

第2章　「とりたて詞」とはどのような語群か 13

1. はじめに 13
2. とりたて詞の意味的特徴とモダリティ 15
   - 2.1. とりたて詞の意味的定義 15
   - 2.2. とりたて詞の含みの意味論的位置付け 23
     - 2.2.1. とりたて詞の含みと前提 23
     - 2.2.2. モ、ダケ、ナドの含みの意味的性質 24
   - 2.3. とりたて詞の意味的特徴とモダリティの関係のまとめ 28
3. とりたて詞の形態・統語的特徴とモダリティ 29
   - 3.1. とりたて詞の形態・統語的特徴に関する共通見解 29
   - 3.2. 非名詞性の問題点 31
   - 3.3. 連体文内性の問題点 33
   - 3.4. 否定的評価を表すとりたて詞と間投助詞との違い 38
   - 3.5. とりたて詞の形態・統語的特徴とモダリティの関係のまとめ 40
4. 「とりたて詞」というカテゴリーが持つ問題点 40

第3章　とりたて詞の階層構造と意味 43

1. はじめに 43
2. 前提となる枠組み 45

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

2.1.　文の階層構造観 45
2.2.　とりたて詞研究と副助詞・係助詞研究の共通観点 47
3.　文の階層構造ととりたて詞の述語制約 48
3.1.　とりたて詞の名詞性・述語制限と文の階層構造 49
3.1.1.　とりたて詞の名詞性と文の階層構造 49
3.1.2.　とりたて詞の述語制限と文の階層構造 49
3.2.　文の階層構造に基づく分析の問題点 53
4.　文の階層構造ととりたて詞の意味 56
4.1.　文の階層構造ととりたて詞の意味の対応関係 57
4.2.　文の階層構造ととりたて詞の意味の対応関係の問題点 58
5.　問題の所在と本書の立場 59

第4章　否定的評価を表すとりたて詞の2種 61

1.　はじめに 61
2.　先行研究 63
3.　否定的評価を表すナド・ナンカの二種 65
3.1.　語彙付加タイプと態度表示タイプのナド・ナンカ 65
3.1.1.　語彙付加タイプ 65
3.1.2.　態度表示タイプ 65
3.2.　語彙付加タイプと態度表示タイプの曖昧性と曖昧性の解消 68
3.3.　井戸（2013, 2015, 2017）、藤田（2021）との違い 71
4.　2つのタイプの否定的評価を表すナド・ナンカの形態・統語的違い 72
4.1.　格助詞の後接 74
4.2.　［N｛ナド／ナンカ｝のN］ 75
5.　ナンゾ・ナンザ・ナンテ、マデにおける態度表示タイプと語彙付加タイプ 77
5.1.　否定的評価を表すナンゾ・ナンザ・ナンテ 77
5.2.　意外を表すマデ 78
6.　とりたて詞の語彙性と含みの違い 80

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

6.1.　語彙付加タイプの含みの表示 81
6.2.　態度表示タイプの含みの表示 82
7.　まとめ 84

第5章　否定的評価を表すとりたて詞の統語的位置と意味 87

1.　はじめに 87
2.　否定的評価を表すとりたて詞が呼応する述部 89
2.1.　疑問文化の可否 90
2.2.　埋め込みの可否 92
2.2.1.　態度表示タイプの埋め込み 93
2.2.2.　語彙付加タイプの埋め込み 98
2.3.　否定的評価を表すとりたて詞の呼応 100
3.　否定的評価を表すとりたて詞における評価主の切り替え 101
3.1.　態度表示タイプ 102
3.1.1.　思考動詞への埋め込み 102
3.1.2.　認識視点が転換する節への埋め込み 102
3.2　語彙付加タイプ 104
4.　間投助詞や名詞接辞における埋め込みと評価主の切り替え 105
5.　否定的評価を表すとりたて詞の形態・統語的性質と評価主の切り替え . 108
5.1.　語彙付加タイプの形態・統語的特徴と評価主 108
5.2.　態度表示タイプの形態・統語的特徴と評価主 109
5.3.　とりたて詞の形態・統語的特徴と評価主 110
6.　まとめ 111

第6章　否定的評価を表すとりたて詞に後接するハと否定のスコープ 115

1.　はじめに 115
2.　態度表示タイプのとりたて詞と否定のスコープ 116
3.　とりたて詞に後接するハと語彙付加タイプと態度表示タイプの切り替え .. 119

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

3.1.　否定的評価を表すとりたて詞へのハの後接 119
3.2.　意外を表すとりたて詞マデへのハの後接 121
3.3.　語彙付加タイプ・態度表示タイプへのハの後接のまとめ .. 123
4.　ハと否定のスコープ 123
5.　否定のスコープを用いないメリット 127
6.　まとめと課題 128

第7章　とりたて詞における否定辞との呼応と前提集合の有無 131

1.　はじめに 131
2.　ダケとシカの対立における前提集合 133
2.1.　先行文脈の有無におけるダケとシカの分布 133
2.2.　定性効果がある環境におけるダケとシカの分布 134
2.2.1.　前提となる概念 135
2.2.2.　現象の観察 138
2.3.　否定すべき他の要素が存在しない文脈 142
3.「誰モが」と「誰モ～ない」の対立における前提集合 143
4.　まとめと課題 144

第8章　結　論 147

1.　本書のまとめ 147
2.　本書の意義と展望 150

初出一覧 153
あとがき 155
参照文献 159
索引 167

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 1 章

序　章

1.　本書の背景と目的

本書の目的は、現代日本語のとりたて詞、とりわけ否定的評価を表すとりたて詞を中心に、その形態・統語的特徴と意味的特徴を記述的に一般化することにある。本書で扱う否定的評価を表すとりたて詞とは、(1) や (2) のナンカのようなとりたて詞である。

(1)　どうやら花子は、研究者ナンカに憧れて、一生懸命勉強しているらしい。
(2)　砂糖入りの緑茶ナンカ絶対おいしくないよ。

否定的評価を表すとりたて詞が示す現象を改めて観察してみると、日本語のとりたて詞全体の体系に関わる重要な観点だけでなく、ことばの「含み」と認識主体（多くの場合は話者）の態度という、ときに構造的に扱うことが困難となる部分について、新たな分析の観点が提供できる。これらの観点に基づいてとりたて詞の現象を記述的に一般化することは、日本語の記述的研究はもちろんのこと、さまざまな理論的枠組みに基づいて行われる研究にとっても重要な分析の土台を提供することにつながると考えられる。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第2章

「とりたて詞」とはどのような語群か

1. はじめに

本章では、沼田（1986）に端を発するとりたて詞の意味的、形態・統語的基準を批判的に検討することで、とりたて詞というカテゴリーにおけるモダリティの扱いの課題について述べる。

とりたて詞の研究史において「とりたて」の研究体系の土台となった沼田（1986）と、それ以降の一連の研究では、とりたて詞の本質的な意味機能は「自者」（とりたてられた要素）と「他者」（自者と同類の要素）の論理的関係にあるとされ、主題のハや、感動詞、文末詞、間投助詞などの「ムードの表現」（沼田 1986: 116）とは明確に切り離されて規定されてきた。沼田の指摘は、とりたて詞が共通して持つ「含み」という一見すると捉え難いもののように思われる意味を、限られた数のシンプルな概念を用いて記述することを可能にした点で、それまでの研究と一線を画している。一方で、その体系において評価や視点のようなモーダルな意味については、「二次特徴」として本質的な意味に対する副次的な特徴として付記されるにとどまっている。

ところが、認識主体の評価というモダリティこそが、むしろとりたて詞の意味的性質や形態・統語的性質に本質的な影響を与えていると思われる現象がある。本章では、とりたて詞を判定する基準として用いられる言語テスト

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第3章

とりたて詞の階層構造と意味

1. はじめに

第2章では、とりたて詞を規定した代表的な先行研究である沼田の一連の研究を批判的に検討し、それまで副次的な位置付けを受けてきた評価や視点といったモダリティに関与する意味が、否定的評価を表すとりたて詞の意味的、形態・統語的性質に本質的に関与していることを指摘した。そのうえで、評価的な意味を持つとりたて詞と間投助詞などの「ムードの表現」が意味的にどのように異なるのか、意味的、形態・統語的に記述していくことの必要性を指摘した。

では、沼田の一連の研究に続く先行研究の枠組みでは、とりたて詞のモダリティはどのように位置付けられてきたのか。本章では、とりたて詞の体系性を指摘する先行研究を概観し、否定的評価を表すとりたて詞の位置付けに関する具体的な問題点をまとめる。

沼田(1989)では、とりたて詞は南分類において「基本的にB段階の要素」であると位置付けられており、モダリティには関与しない位置付けを基本としていた。しかしその後の研究においては、とりたて詞はさまざまな文法的階層に位置付けられるとする方向性が受け入れられており、当然その中にはモダリティが関与する文法的階層に位置付けられるものもある。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第4章

否定的評価を表すとりたて詞の2種

1. はじめに

第2章・第3章では、それまでとりたて詞の規定において副次的な位置付けがなされるのみであった評価というモダリティが、とりたて詞の意味的、形態・統語的性質に本質的に関与していることを論じた。そのうえで、否定的評価を表すとりたて詞は、その形態・統語的特徴と意味的特徴の関係に関する分析が不十分であり、単一の文の観察ではなく文脈レベルでの観察をする必要があることを論じた。

第4章では、これらの問題意識に基づいて、まずは先行文脈との関係という観点から否定的評価を表すとりたて詞の現象整理を行う。特に本章では、否定的評価を表すとりたて詞には先行文脈との関係が異なる2つのタイプがあることを指摘する。その2つのタイプを、以降の節では便宜的に「語彙付加タイプ」と「態度表示タイプ」と名付ける。

本書では、これら2つのタイプは文中で果たしている意味機能が異なり、さらにそれぞれ形態・統語的特徴が異なることを指摘する。特に、語彙付加タイプは副助詞の、態度表示タイプは係助詞の形態・統語的特徴と一致することを指摘する。この観察は、否定的評価を表すとりたて詞に同音異義語を仮定すべきことを示唆している。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers